

フォーラム—地形図に現れる福井の地域環境

## 9：味真野小考

Forum : Fukui's Past and Present in the Topographical Maps

9 : Historical Geography of Ancient Ajimano

門井 直哉\*  
(教育地域科学部・社会系教育講座)

### 1. 味真野の地形と景観

味真野とは、武生盆地の南東部を流れる文室川や鞍谷川によって形成された扇状地一帯の呼称である。(図1) 扇状地とは、文字通り、扇状の広がりをもつ緩傾斜地のことで、堆積する土砂は砂礫質のため、地表を流れる河川の水量は少ない。図1では、文室川は伏流して水無川の状態となっている。このため同川はかつて「水無瀬川」とも呼ばれていた。

伏流水は扇端と呼ばれる扇状地末端部で地表に湧出する。図1にみえる清水頭の地名は、このような湧水に因む地名であり、その北隣の若宮には現在も「若宮清水」という湧水がみられる。(図2) 五分市などの古い集落は、こうした扇端部に多く立地している。

一方、扇央と呼ばれる扇状地中央部は、用水の確保が困難なために水田化から取り残されてきた地域である。いわゆる「野」とは本来、このような小高い地形で水がかりが悪く、雑木林や竹林が生い茂る未開の土地を称したものである<sup>1</sup>。江戸時代の『越前国名蹟考』は、「古はさばかり大成野にてありけんを、次第に作毛を付て、今は清水頭の西南野大坪の辺わづかばかりの野となれり」<sup>2</sup>と記している。図1では、五分市付近から上大坪にかけての扇央部に桑畑や茶畑が広がるが、その一方で、文室川や集落の周辺には竹林が広く分布し、「野」の名残がうかがえる。

### 2. 中臣宅守と北陸道

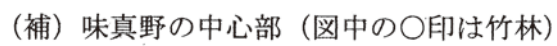
『万葉集』巻15には、天平年間に越前国に流されてきた中臣宅守とその妻・狭野弟上娘女との間に交わされた相聞歌63首が収められている。その中にある「あぢま野に宿れる君が帰りこむ時の迎へをいつとか待たむ」(3770番)という娘女の歌から、宅守は味真野に滞在していたことが知られる。

ところで、「獄令」犯徒応配居役者条によると、流人は配所において官役に従事するものと規定されている。官役の内容は不明であるが、「延喜式」囚獄司によると、京で収監された徒人の場合は、路橋づくりや、雑事、宮城内外の清掃に従事することとなっている。流人の場合もこれにほぼ準じていたとすれば、配流の地である味真野にも何らかの公的施設が置かれ、宅守はそこでの官役に従事していたものと考えられる。

では、味真野にはどのような公的施設があったのか。その一つとして考えられるのは阿味駅である。阿味駅は丹生郡内に置かれた北陸道3駅のうちの1駅で、弘仁14年(823)の丹生郡分割により今立郡の所属となった駅である<sup>3</sup>。「延喜式」九条家本が「アチマ」の読みを付していることから、同駅は味真野に置かれたものとみられる。

畿内方面から北上してきた古代北陸道は、おそらくは敦賀郡<sup>4</sup>羅駅の比定地・南越前町鯖波から日野川を渡河し、牧谷越えにより味真野へと到達したものであろう。味真野では、上大坪から新宮にかけて東南-北西方向に断続的に続く直線道路(図1・a、b、c)が認められる。また、岩内山の北端付

\* Naoya Kadoi (Department of Geography, University of Fukui, Fukui 910-8507, JAPAN)





近においては、直線状の南北村界線が存在しており（図1・d）、古代の北陸道はこれらを結ぶ形で北上したものとみられる<sup>4</sup>。なお、この直線境界上には、古代の北陸道を踏襲するかのように、現在も北陸自動車道が敷設されている。（図3）

そして阿味駅は、おそらく推定北陸道と五分市方面への道が交差する小字「味真野」（図1・二）付近に置かれたものであろう。文室川右岸の小字「小松ヶ淵」（図1・ハ）の付近一帯は俗称「秣原」といい、継体天皇の馬用の草刈場と伝えられている<sup>5</sup>。

なお、推定北陸道は、d 地点からそのまま北上すると鯖江市鳥羽町付近で浅水川を渡河することになる。しかし、ここは浅水川の乱流地帯であり、安定的な渡河点ではなかったものと思われる。したがって、北陸道はおそらく鯖江市定次付近で式内・舟津神社および大山御板神社の位置する王山に向かって西折し、その後は鯖江台地東縁の近世北陸道に沿って、丹生郡内の3駅の1つ、朝津駅を目指したのであろう<sup>6</sup>。朝津駅は福井市の浅水が遺称地名であるが、丹生郡と足羽郡の郡界は浅水川（現・朝六川）とみられるので、同駅は左岸の浅水二日町付近に置かれたものと推定する。（図4）

### 3. もう一つの北陸道

丹生郡内に設置された3駅の残る1つに丹生駅がある。同駅については、日野川左岸に「丹生郷」の遺称地名が存在することもあり、越前国府の近辺に置かれた可能性が高い。とくに慶長15年(1610)、平出村より移転してきた越前市深草の金剛院は、方1町程度の区画を有し、近年発掘された小犬丸遺跡や落地遺跡飯坂地区など山陽道の駅家遺跡の区画規模とも近似することから、丹生駅の重要な候補地とみなしうる。

さて、日野川左岸に位置した丹生駅は粟田部道（図1、図4）を経て、前述の北陸道に接続したものと推察される。しかし、この場合、阿味―丹生の駅間距離は約6.4kmであり、令の規定する30里（約16km）よりも著しく短くなる。一方、丹生―朝津の駅間距離については、約16kmで令の規定と相違しないものの、鉤状に進行するルートは全体的に迂遠となり、駅路としての合理性を欠く。したがって、丹生郡内の北陸道については、阿味―丹生―朝津という一連のルートを想定することは難しく、阿味―朝津を結ぶ北陸道とは別に、丹生駅を通過するもう一つの北陸道が想定されるべきだろう。

その北陸道は、おそらく淑羅駅から妙法寺山を目指して北西方面に進み、越前市四郎丸で清水山に向かって北折、丹生駅を通過した後は、鯖江市石田上町・石田下町付近で吉江方面に日野川を渡河し、鯖江台地を横切って朝津駅へと到達したものと推察する<sup>7</sup>。（図4）前述の金剛院の北辺に発する南北道路の北延長には、越前市芝原・家久・本保から鯖江市小泉町にかけて、約4.6kmにわたる直線大字界が存在し<sup>8</sup>、南延長では河濯川や春日野川の河道がこれと一致する。これらの事実は、日野川左岸における北陸道の存在を示すものと考えられる。

なお、上記の想定による場合、淑羅駅から朝津駅までの各駅間距離は、丹生駅経由ルートで<淑羅―（約9.5km）―丹生―（約13km）―朝津>、阿味駅経由ルートで<淑羅―（約9.4km）―阿味―（約15km）―朝津>となる。規定の駅間距離よりは短いものの、北陸道では越中国の川人駅―日理駅、白城駅―磐瀬駅、磐瀬駅―水橋駅などの駅間距離が7～8km台なので、上記の想定に特に無理はない。

### 4. 古代の中核地域としての味真野

丹生郡内の二つの北陸道のうち丹生駅経由ルートは、越前国府に通じることから、北陸道の本路として機能したものとみられる。一方、阿味駅経由ルートは、本路に対するバイパスと位置づけられよう。

ところで、古代の敦賀郡は、木ノ芽山地を越え、「今宿」付近（図4）までを郡域としていた<sup>10</sup>。郡界が同地付近に設定されたのは、その一帯が日野川の氾濫を受けやすい地域として開発から取り残され、未開の自然的境界として認識されていたためであろう。「四郎丸」「今宿」などの地名は、同地の

開発が中世以降に始まることを示している<sup>11</sup>。

そして、このような地域を通る丹生駅経由ルートは、日野川の氾濫によってしばしば寸断されたものと推察する。それ故、山越えを伴い、しかも淑羅駅から朝津駅までは丹生駅経由ルートよりも約1.9km 長い阿味駅経由ルートが、短絡路としてのメリットがないにもかかわらず、予備のルートとして存続していたのであろう。他に例をみない複線の駅路が、丹生郡に設定されていた理由については、このように考える。

しかしながら、丹生駅経由ルートと阿味駅経由ルートの関係については、なお一考を要する。それは味真野とその周辺が、古代の丹生郡および越前国の中核地域であった可能性も考えられるからである。

そこで注目されるのが、天平神護2年(766)の「越前国足羽郡道守村開田地図」(以下、「開田地図」)が、日野川を「味間川」と記載している点である。日野川の名称が支流域に位置する味真野に因むということは、味真野が日野川の上流域として重視されていたことを示すものであろう。

なお、「開田地図」に「生江川」と記される足羽川の上流域には白鳳寺院・篠尾廃寺があり、足羽郡の郡領氏族・生江氏の本拠地とみられている。一方、味真野にも白鳳寺院・野々宮廃寺があり(図1・イ)、当地を本拠とする豪族の存在が想定される。『続日本後紀』承和6年(839)4月7日条には、越前国から京に本貫を遷した「味真公御助麻呂」なる人名がみえるが、味真氏なる豪族が当地に存在していたとするならば、「味間川」の名称は同氏に由来した可能性がある。おそらく味真氏も、生江氏と同様、一時は丹生郡の郡領クラスの勢力を有していたのではないだろうか。

味真野周辺の中心性を示す傍証は他にもある。

味真野の北方・三里山の東麓にある式内・国中神社は、その社号を一国の中心に位置すること由来するものと伝える<sup>12</sup>。(図5・ア)同社の祭神は越比古神、越比咩神という越の国魂神であり、「国中」とは、政治的意味における一国の中心として理解される。また、国中を含む越前市中津山付近一帯は、『和名抄』にみえる今立郡中山郷に比定されるが、栗田部にある岡太神社の由緒は「越の中山蓬萊山(今大山と云う)の麓に、岡太神社を奉斎し給ひて」<sup>13</sup>と伝え、「中山」は元来、三里山全体の呼称とも考えられる。おそらく「中山」の場合も、政治的中心が三里山の周辺にあったことにより生じた地名であろう。このような「国中」や「中山」といった中心性を反映した社号や地名が、越前国府に程近い村国山ではなく、そこから離れた三里山に存在する点が注目されるのである。

さらに、味真野や栗田部における、継体天皇に関する伝承の分布にも留意したい。味真野は即位前の継体天皇(男大迹王)が暮らしていた土地として謡曲「花筐」の舞台となっており、味真野神社がその御所跡と伝えられている。(図1・ロ、図5・イ)また栗田部は、継体天皇の名に因む「男大迹部」から転訛した地名といわれ、佐山姫公園(図5・ウ)付近がその御所跡と伝えられている。他にも継体天皇に関する伝承は数多い。

勿論、伝承は必ずしも史実とみることはできない。しかし、これらの伝承が国府の置かれた越前市街周辺ではなく、味真野や栗田部の周辺に数多く分布する事実は、少なくともこれらの地域に伝承を生む下地があったということであり、これらの地域が継体伝承と結びつくような古代の政治的中心であったことを示すものであろう。

以上のように、味真野周辺が古代のある時期、丹生郡および越前国の中核地域であった蓋然性は極めて高い。そして、その時期が律令時代にまで下るとすれば、当初の丹生郡家は味真野周辺に置かれ、国司もまた当地を拠点に活動をしていた可能性が考えられる。

それでは、味真野から越前市街へと中核地域が移転したのはいつなのか。ここで注目されるのは、天平17年(745)、佐味朝臣虫麻呂が越前国の守に就任している点である。佐味朝臣虫麻呂は丹生郡の郡領氏族・佐味氏と同族関係にあることから、この頃、深草廃寺付近を本拠とする佐味氏の働きかけによって、越前市街への国府誘致が実現したのではないだろうか。各国で国庁や曹司などの施設が創設される時期は、第Ⅱ四半期を中心とする8世紀前半から8世紀中頃のことといわれているが<sup>14</sup>、天平17年であれば、まさにその時期にも該当することになる。日野川右岸の村国遺跡では、「佐味」



「佐」「佐印」などと墨書された、8世紀中頃から9世紀前半の土器が出土しているが<sup>15</sup>、おそらく佐味氏は国府建設を契機に、日野川左岸の深草廃寺周辺から日野川右岸へと本拠を移したのであろう。

ところで、越前市街への国府建設が8世紀中頃にまでずれ込んだのは、佐味氏が持統3年(689)頃、関東から越前国に移住した新興勢力<sup>16</sup>であったためと思われる。天平5年(733)の「越前国郡稻帳」に丹生郡大領としてみえる佐味君浪麻呂は、天平3年(731)の「越前国大税帳」では少領として現れる点にも留意したい。佐味氏が自らの本拠地を中核地域となしうる勢力に成長するには、やはり半世紀程度の時間を要したのであろう。

さて以上のように、味真野が越前市街に国府が成立する以前の中核地域であったとするならば、丹生郡内でまず整備された駅路は阿味駅經由ルートということになる。そして丹生駅經由ルートは、越前市街における国府の成立に伴って新たに整備された駅路ということになる。ただし前述のように、丹生駅經由ルートは不安定であったが故に、阿味駅經由ルートも予備の駅路として存続することになったのである。

なお、越前市街における国府の成立が天平17年以降であったとすれば、同13年(741)に建立の詔が発せられた国分寺についても、味真野周辺に置かれた可能性が出てくる。越前国に関しては、従来、大虫廃寺や深草廃寺などの白鳳寺院が国分寺に転用されたとの見方があるが<sup>17</sup>、味真野に求めるとすれば、野々宮廃寺がその候補となろう。

## 5. おわりに ―「太介不乃己不」と味真野―

中臣宅守が越前国に流されていた時期については、天平11年(739)から同13年(741)の頃といわれている<sup>18</sup>。以上にみてきたように、味真野周辺が当時の越前国の中核地域であったとすれば、官役に従事したであろう宅守が味真野に滞在していたのは、むしろ当然のことであった。

ところで明治2年(1870)、現・越前市の旧名「府中」から「武生」への町名変更が行われた際、典拠となったのが『催馬楽』(8世紀末～9世紀初)の古謡「道の口 武生の国府に我はありと 親に申したべ 心あひの風や さきむだちや」であるが、8世紀中頃までの越前国の中核地域が味真野周辺であったとすると、この古謡については別の解釈が成り立つように思われる。

すなわち、古謡の中の「国府」は、原文では「己不」と表記されるが、これに「古府」の字を当てるならば<sup>19</sup>、この古謡は越前市街に国府が成立した後の味真野周辺で謡われたものとも解釈できる。また「武生」は、原文では「太介不」であるが、これを「竹生」とし、竹が繁茂する土地と解するならば、竹林が広く分布する味真野は、まさにこれに適う景観といえる。(図1・補)国府が置かれた越前市街も、江戸時代や明治の初め頃は竹藪の多い町といわれているが<sup>20</sup>、少なくとも明治期の地形図では、味真野はどこよりも多くの竹林分布を示している。このような状況が古代にまで遡るとすれば、「太介不」の地は味真野こそがふさわしい。

『催馬楽』の古謡にある「太介不乃己不」とは、元来、「竹生の古府」の意で、味真野を称したものが、後に「己不」が「国府」と解されることによって、「太介不」もまた現在の越前市街の地名と認識されるに至ったのではないだろうか。一つの解釈として提起しておきたい。

- 1 足利健亮『景観から歴史を読む』、日本放送出版協会、1998年。
- 2 井上翼章『越前国名蹟考』、1815年。
- 3 以下、本稿で「丹生郡」の語を用いる場合、弘仁14年(823)の分割以前の郡域を示すものとする。
- 4 ①金坂清則「古代越前国地域整備計画についての一試論 ―今立・丹生郡を中心に―」、日本海地域史研究、第5輯、1984年。②金坂清則「北陸道 ―その計画性および水運との結びつき―」(木下良編『古代を考える 古代道路』、吉川弘文館)、1996年。
- 5 真柄甚松「古代における越前の国府とその周辺の景観」(藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』上、大明堂)、1978年。
- 6 門井直哉「越前国丹生郡・今立郡の北陸道」、自然と社会、72号、2006年。
- 7 門井直哉、前掲6。
- 8 真柄甚松『日野山が見、日野川が知っている 武生盆地の歴史 ―奈良時代を中心に―』、2004年。
- 9 木下良監修、武部健一著『完全踏査 古代の道 ―畿内・東海道・東山道・北陸道―』、吉川弘文館、2004年。
- 10 寛正5年(1464)8月の「大塩八幡宮縁起」(八幡神社蔵)に「敬白越前国従省郷之内八幡大菩薩御縁起之事」とあり、『和名抄』にみえる敦賀郡従省郷は、大塩谷川流域を郷域に含んでいたものとみられる。また、敦賀郡の式内社・質覇村峰神社については日野山山頂にあったとの伝えがある。(『福井県の地名』平凡社、1981年。)
- 11 真柄甚松、前掲8。
- 12 福井県神社庁『御大典記念 福井県神社誌』、1994年。
- 13 福井県神職会『福井県神社誌』、1936年。
- 14 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』、塙書房、1994年。
- 15 真柄甚松、前掲8。
- 16 真柄甚松、前掲8。
- 17 『福井県史』通史編1 原始・古代、1993年。
- 18 真柄甚松、前掲8。
- 19 水野和雄『越前敦賀の復権』その後、福井考古学評論、第11輯、1999年。なお水野氏は「己不」を「古府」と解して、奈良時代の越前国府を敦賀に比定する。
- 20 東壮价「竹」と武生」(武生市文化協議会『武生風土記』)、1974年。



図2 若宮清水



図3 旧村界線上を走る北陸自動車道（右）

※北から南を撮影。日野山の手前に岩内山が見える。

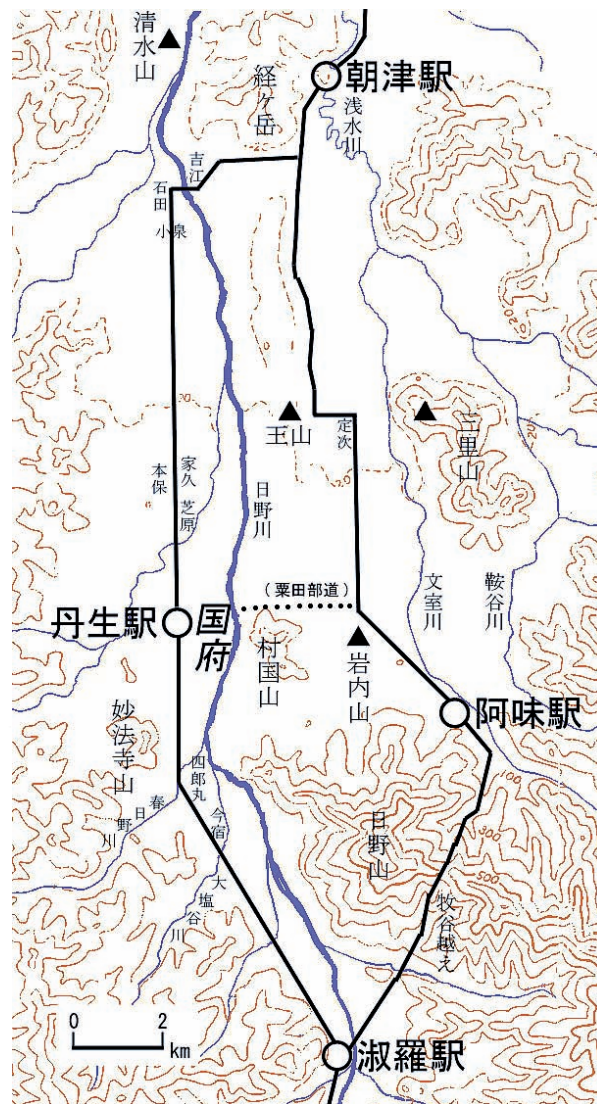


図4 丹生郡内の北陸道



